

# 三河 アララギ

2024年 令和6年12月 師走  
しわす

十二月号

第七十一巻 第十二号



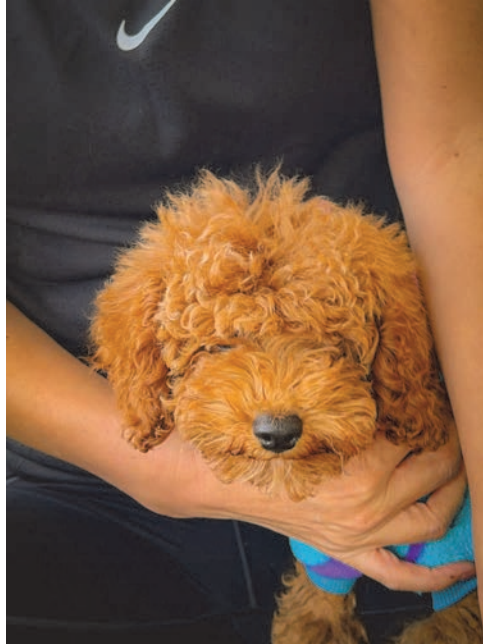
「ジャックフルーツ」 アマゾン河に広がるジャングルに一人わけ入って描きました。

ニューヨーク日記(218) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

PUPPY YOGA

## Blue Shoe Diaries



子犬ヨガに行ってきました。いかにも楽しそうでしょ?本当にそのままヨガやっ  
てる間子犬ちゃん達が走り回ったり、遊んだり、眠い子はヨガやってる人間の上  
でお昼寝とか。もーすごく可愛かったよ。このクラスクセになるかも?結構毎回  
犬種が代わるからそれも楽しみ。

We practice yoga regularly. I've tried all kinds of yoga, but this one was a first! We went to Puppy Yoga this weekend. And it's exactly what that sounds like: You yoga and play with a bunch of puppies. Some puppies were so hyper that they were practically levitating, while others, it was nap time, slept on a yoga-practicing human the entire class.

# 目次

## 第七十一卷第十二号(通卷八五二二号)

表紙・ジャックフルーツ (1)

ニューヨーク日記(218) Blue Shoe (2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫 (4)

歌集「草々」 今泉 米子 (5)

三河アララギ歌集VI 大須賀寿恵 (6)

三河アララギ歌集V 夏目 勝弘 (7)

『歌集 八千代』 岡本八千代 (8)

三河アララギ歌集VII 弓谷 久子 (10)

ヒトリシズカ 今泉 由利 (12)

紫式部 安藤 和代 (14)

朝食 清澤 範子 (16)

大根の種 山口千恵子 (18)

誕生日 杉浦恵美子 (20)

歯痒きかな 伊藤 忠男 (22)

庭中改修(その九) 白井 信昭 (24)

柿の実 矢崎 直人 (26)

『いとよせ』 いーはとよぶ 牧原 規恵 (28)

水野 絹子 (28)

現代学生百人一首 東洋大学 稲吉 友江 (29)

鈴木美耶子 (29)

牧原 正枝 (30)

森 厚子 (30)

大武 智子 (31)

山川 颯月 (32)

藤田 潤夏 (32)

川瀬 天寧 (32)

渡邊 結 (32)

丸井 遙香 (33)

石川 奏太 (33)

長岡 芽 (33)

石川 直樹 (33)

植村 公女 (34)

木村 歩歩 (34)

今泉 如雲 (34)

矢崎 直人 (35)

今泉 由利 (35)

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集 (36)

折々の詩(十) ふじのけんじ (38)

五感を澄ませば(30) 杉浦恵美子 (40)

附録(三十) 矢崎 直人 (42)

『雑感』 中屋 保之 (44)

『酔いの徒然』(152) 丸山酔宵子 (46)

『子守唄 わらべうた』 そして童謡 高橋 育郎 (48)

絹の話(169) 今泉 雅勝 (50)

『江上浩二の独り言』 江上 浩二 (52)

初狩便り37 花野みぶり (54)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 本田 勇気 (56)

康鍼治療院 玄翁 (58)

『岩手吟行』 殿山 木風 (60)

編集室だより 今泉 由利 (62)

『三河アララギ』について (64)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

光とどかずなりしところに南天のごとしの朱き珠見えそむる

一日のまた暮れゆくに出でて歩み風邪にもあらぬ咳して歸る

待つとしもなく待つあることを樂しみて老病もちつつ存ながらへゆかむ

庭を掃くこともなけれどおのづから冬枯るる羊齒冬青き羊齒

木の下の恆に小暗きかげ踏みてつひに音せぬ小鳥歩めり

鉢の中に草生ひしめて年ふれば鉢土かたく盛り上りくる

枯れはてし草といへども根をふかくわが引く手力に抵抗をする

庭師らが積み上げゆきし柴木の束所を移せこんにやく萌えむ

鐘樓の蔭なる白き枝垂梅時の移りの名残のごとし

植ゑぬ木の幾種いく本芽ぶきつつ深山みをなせりわが裏庭は

歌集 「草々」

今泉 米子

雨霧の中を來りて病める子をただ見るのみに吾のすべなし

酸素テントの中に執りたる吾が子の手のピアノノ弾きゐしかたき指先  
意識なき眠りつづくる吾が子の邊にまたあたためたる重湯さめゆく

病棟の屋根の氷雨にゐる鳩を子の見て云はむ日をわれは待つ

意識なく病める吾が子をおもふ日々土のいろなるカタカゴの萌え

くれなゐの枝垂柳をよろこべよガーゼの肌着たづさへゆかむ

寒アヤメむらさき淡く咲きつげりくるしみ心の中に云ひあふ

夕暮はまだ寒くしてかたかごのうなかぶす花の地に吹かるる

たまたまに早起きしたり庭の櫻松あひだの間の逆光の中

春となりしこをも知らず病む吾が子よ庭の土筆のとき過ぎてゆく

### はゞきくさⅢ

大須賀寿恵

垂れゐたるクリスマススカクタス立ちなほりくれなるの芽をいだし始めぬ  
くれなるの嫩芽のびつつ節々に根を垂らしつつゆるるカニ草

アイリスの花の終りの花畑に這ひ伸びて来るクリカボチャの蔓  
降るともなく晴るともなく一日過ぎ梅の林にさわぐ雀等

あかときの明りさし来ぬ性教育即純潔教育の論読み飽きて

ひととせの休耕ののちの山田二反売らむかといふ病み臥す兄は

更紙五〇〇枚抱えて昇る五階まで五度休む立ちとどまりて

池の上を風渡りゆくさわさわと蓮の広葉の裏返りつつ

あたり前のことがすなほに云へぬこと云ひ合ふ中に朝のベル鳴る  
立ちあがる力は日々におとろへてスモンを憎む心失せゆく

三河アララギ歌集V

夏目勝弘

丸まりて寝ねゐる犬が悲しげに鳴きをり夢を見てゐるならむ

一日を家に籠りて過ごしたり身近に騒ぐ猫憎みつつ

昼寝より覚めて時の間思ふこと忘れてゐたる遠きことばかり

生き死にも○か×かで決めてしまふ短絡といはむ進化といはむ

偏差値といへる数字に学生等は脅ゆるとみるは我のみなのか

冬の日の一日照れば我が今日の風呂は沸くなりああ有難や

太陽にて沸きたる風呂に浴みをり一日を無駄にせしを悔ひつつ

白き飯食ひたきゆゑに歩みし道今日は歩むその叔父の葬に

塩つけて食ひし瓜の味今にあり野田城駅より遠く歩みきて

九十年生きて逝きたる叔父の顔食を助けられし日々をぞ思ふ

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

靄深き一日暮れて二人だけの女教師われら二人にて帰る

当用漢字に無き靄といふ字を教へをり靄深きけさの第一時限

靄の中より日のさしくるを生徒らにしばし見せをり国語の時間

生徒減りて空きたる一つの教室に古雑誌積みて図書室となる

わが教へしカレーライスのにほひつつけふは昼間の青年学級

糠も塩も目分量にてとわがきめて大根五十本を漬けてしまひぬ

竹箨のにほひ残れる二斗樽を買ひ来てことしの大根を漬ける



天城トンネル越えてほど遠き樹の茂み愛親覚羅慧生は死す

富士を巡る道の一日に富士に飽く杉の樹林に残る雪あり

遠笠山下りゆくとき綿虫の舞ふがごとくに粉雪のふる

富士をめぐる道くれゆきてなほもゆくわれに見えざる闇の夜の富士

女教師のわれら二人の泊る部屋障子にアカシアの枝の触れをり

うすくれなるに朝の光のさし始め障子にアカシアの枝ふる音

蝦の皮臭へる雨のヨットハーバーにマラソン大会はやく終りぬ

砂浜に一つ張りたるテント小さくやがて傾く雨にたるみて

三河アララギ歌集Ⅶ 御津山の麓にて 豊川 弓谷 久子

小心にて一生過ごしし父を思ふ槇垣の陰に咲く白き茶の花

歩きたいと病みゐる夫はまた言ひぬ足腰萎え絵し年月を思ふ

松葉画廊に三十三点の花の絵並べ我が子の初の個展始まる

樹齡など確かめざりき力寿姫の碑覆ひて咲ける山桜

幼なき日の我が子の晴着の小布にて匂ひ袋縫ひぬ柿の形に

新緑の木々をゆるがす青嵐御津山すべてなびきゐるごとし

本文と注釈とを互かたみに今宵も読みて白河の関越ゆ我が奥の細道

終の日まで家にて看病みとりたしと子が言ひぬ病む我が夫の菓子を買ひつつ

朝よりの猛暑に我の思ひ深し逝きにし兄の日も弟の日も

夕べ来て浄願寺の庭に白々と落ちゐる沙羅の花を拾ひぬ

帰り行く子の自動車のテールランプ山下橋を渡りて消えぬ

黒き表紙に金の横文字のダイアリー今日より我の新しき日記帳

入院の夫に付き添ひしは二十年前癒ゆる日無しとは露も思はず

しで辛夷の花白々と今年も咲く御津山の麓に我は住みをり

## ヒトリシズカ

東京 今泉 由利

良き相手に出逢ひしならむ螢火の二秒三秒点滅見てゐる

見ゆる間にほぐれゆくくまつ白し夕顔の花の今日の真白

日本国の安寧をニニギノミコト子孫天皇の稲作五穀豊穰を

指折りて秋の七種数へゐる萩尾花はぎおばなくすなでしこおみなえしふじばかまさがお葛瞿麦女郎花藤袴朝貌

東京の都心にして二十二度十一月の日の朝明けてゆく

恵比寿なる町中にして見付けたりペンパスグラスの大き穂なびく

アルゼンチンのパンパスに着陸す日本より来し飛行機の窓

ひとさじの蜂蜜紅茶にとけてゆくアルゼンチンのパンパスの味

アルゼンチンへ行って戻りぬ地球の上を四万キロの旅であり

戦争の最中でありき八月十九日そして今日の八月十九日

2018年7月29日アマゾン・ジャングルにてジャックフルーツの前

サグラダファミリアにて求めし葉のページより今日を始むる

バラ科にてバラ属と咲く赤いバラ私の机の今日の芳し

直ぐ立つる莖の天辺赤く赤くただ赤く咲く曼珠沙華梵語

ヒトリシズカ・センリョウ科の白い花咲く位置を確かむ

## 紫式部

豊川 安藤 和代

空高くさ庭も季は訪れて紫式部に小さな秋

土、水、鉢重くなれども百合が好き注文球根今日は来るかな？

日々稲は実りの色も濃くなりて高く輪描くトビ一羽見ゆ

今日やろう明日はやろうと庭草を抜くをのばせば草も伸びゆく

稔田を吹き抜けてくる風さやか心明るく歌など詠まん

若き日に打ちたる手首の痛む時予報士よりもわかる天候

動画から曾孫の成長見る度に心も軽く家事進みゆく

父の享年迄に十年以上あり負けてなるかと背筋を伸ばす

大笑いも大泣きも共にしてくれる友ありて日記に幸せと記す

日は早し息子の一周忌明日なるに未だ信じれぬ愚かなる吾れ

秋夜長一首詠まんとペン持てば鉛筆だこのかすかに痛む

逝きて三年隣の庭の次郎柿小母ちゃん偲ばせ色濃みゆく

虫の声細くなりきてひんやりと吾が足裏にふるる畳よ

この季節大根旨しと亡き父の笑顔うかびてやや寒の夜

暮れ早き今日のひと日よ事もなく過ぎて満足眠りにつけり

## 朝食

春日井 清澤 範子

朝食の前にラジオ体操あり吾は身心思い切りのばせり

先生と呼ばれし背丈の長い人一時間もかかりて朝食をする

ホームの食事はいただくが主に魚料理多かりし

老人ホーム朝はそれぞれ身仕度をして看護師の手を借りぬ



吾の居る老人ホームに秋は来ぬ九月を過ぎて爽やかな風

テーブルに並び介護を受けながら魚料理たらをいただく

## 大根の種

豊川 山口千恵子

家籠る夫に買ひてささげ持つみたらし団子のぬくぬく包み

納屋毀つ隣家の人と立ち話大き植木鉢かかえて帰る

立てし畝に大根の種三粒ずつ青き芽生えを思ひて楽し

入り口に枯れし向日葵立ち並ぶ広き公園人かげもなし

わが前を赤とんぼ群れてとびてをり吹きくる風に稲穂さらさら

扇風機の羽根に付きたる綿埃暑かりし夏思ひかへしぬ

わが庭に今日も来たれる野良の猫瘦せやせし猫われに懐かず

垂れ下がるダチュラの蕾見つ立つ十月下旬まだ暑き日々

わが植ゑし甘夏柑の若き葉を喰ひて残しゆく黒き粒々

暑かりし夏もやうやく過ぎ行けり桜の枝に返り花一花

コスモスの花咲く処目指し行く足弱はき夫励ましながら

泥付ける大ききつま芋貰ひたりみかんの肥料の袋に入れつつ

咲きつぎてはや霜月にならむとす赤き色こき百日草

堀ごしに花ふさふさとダチュラ咲く夏の暑さの鎮まりし頃

この花の終はれば枝を切りとらむ花咲くダチュラの下に見て立つ

## 誕生日

蒲郡 杉浦恵美子

出掛くる日まさしく私の誕生日自ら祝はんこの歳なれば

どの店に行かん偶にはフレンチのカウンターなど我が誕生日

初めての見知らぬ街はたそがれて頼りのスマホも心許ない

辿りたるビストロどうやら居抜きらしなるほど戸口もひっそり構へ

躊躇ひつつ扉そうつと開けたれば店主気さくに語り掛けたり

この店は店主ひとりが切り盛りのビストロ独りの我に相応し

乾杯をする相手とてなけれどもキール頼めり我が誕生日

頼む人あまりないのか戸棚奥カシスのリキュール仕舞はれてあり

折角の我が誕生日黒板のメニューの中よりアワビのソテー

アワビなど二口三口の可愛ひさよ柔らかいけどじつくり噛みしむ

カウンターのみのビストロ瞬く間店主と距離が近づいてゐる

カウンター越し酔客が無理な注文つけると店主はこそつと零しぬ

裏藪の脇道歩めば知らぬ間に夥しくも西洋朝顔

この紫ブラックナイトと云ふさうだ竹藪などにはとても似合はぬ

数輪が楚々と揺ればよいものを竹藪一面ブラックナイト

## 齒痒きかな

大阪 伊藤忠男

友と会う楽しみ胸にクラス会参加する人寂しくなりぬ

臃げに見える未来も歳とも薄くなるのは仕方無きかな

バースデー月に思いは明日か過去未だ救いや夢忘れない

美しき花に囲まれ見える先行けど行けども辿りつかぬや

雨の日の朝は冷たき風が吹く冬の訪れ目と鼻の先

紅葉の色はまばらも風吹けば落ち葉舞う庭やはり秋

夏のまま時だけ過ぎる秋の宵沈む夕日は早くなりけり

柿の木に止まり戸惑う親ガラスどこを探すも実一つなし

温暖化待ったなしなる常識も通じないのかあの国のかれ

大阪を超えて和歌山物価安車走らせ買い溜めをする

綿雲の向こうに見えるウロコ雲秋呼ぶ空は裏の裏なり

宇宙への旅立ち今も昔なり出発その地日本橋なり

AIが人を超える日間近なり新たな世界に我ら居るなり

共生を対話で築く人の知恵今や無きかな分断の波

80を過ぎて歯がゆさ身に染みる今の今とて階段避ける

## 庭中改修(その九)

豊川 白井 信昭

明け方の家近くして養魚場。ピーピー鳴りて一日始まる<sup>ひと</sup>

ブロック当てU字溝三個。豆板の水平と段差確かめつずらす

車庫の下柱<sup>した</sup>の間踏み台は高さ六十センチ長さ二メートル余り

生け垣の土留<sup>へ</sup>囲いのブロックの上踏み台造る車庫の入口

残りたるブロックなどあれこれと繰り返しつつ積み上げにけり

生け垣に踏み台叶いて今日よりは脚立使わず上り<sup>あが</sup>下り<sup>お</sup>できる

夏日なる暑さ惜しみてか裏の田に赤とんぼなほ舞う稲穂の上<sup>へ</sup>



二種類のこの蟬達は日本にて発生の恐れあるやなしや

農の道用水浴い咲く彼岸花赤白黄あまた今を盛りと

花壇跡土流出をば防がむと路板外しながら下地を上げゆく

門口に瓦礫コンテナに一箱と日日折折分別仕分

改めて板一枚を取りやめて白き蛍石入れ込み終えぬ

吹く風の土埃よけと生け垣の中に囲える脆石幾つ

入出口中間支柱踏み台の三段ようやくコンクリに固定

角口の垣根下花壇はみだしし葉に葉に数多の蕾

## 柿の実

埼玉 矢崎 直人

柿の実の日々色づいて柿に生る葉は落ちて実は柿の柿色

休日のジョギングコース目に映る景色は日に日に冬に近づく

与野フード新装開店スーパーの名はT A I R A Y Aに看板が出来

思うより考えている考えに気づき気持ちに嘘はつけない

豆腐売りの笛の音車がゆつくりと動いて空気冷たくなりぬ

良い方に向けられること見えたなら言はねばならぬことは言はねば

冬の風吹きつけてきた硝子戸のように心が張り詰めていく

生き残り掛けて政治家サバイバル木枯し一号吹き抜ける島

安心の安全のある相談の相手のあつて相手のいること

観察の真の姿顕せる心の姿描き出したる

何もかも表にされる世の中で言いたくないも認められずに

永遠の命の在処哲学の生命を説く書物紐解く

関わりの中に在り方探してる分断された在り方よりも

おぼろげに頭の中で分かっているだけではなくて言葉に出来る

学校にテキスト持って行き忘れテキスト一冊先生に借りる

『いじやよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

延々とコキアのカボチャの畑はた続くサロマ湖畔は朱色にのまれ

水野 絹子

暗闇を飛び去る光重なりて見つめる間に青函ま抜ける

血に染まる軍服を見し十五の夏五稜郭になほあるだらうか

台風十号が迷走する間、北海道を一周しました。天候には恵まれたけど、新幹線が止まり帰宅難民となりました。

突然に目覚めほつとする緊張の入試に遅刻の夢を見しあと

牧原 規恵

急激な体の衰へ感じるも日々の暮らしは変へる事なく

大型の台風来るとふ雨戸締め真暗き中にちつとしてをりぬ

最近よく夢を見ます。それもドキツとする夢ばかりです。どう言う訳かしっかり覚えていて不思議な気がします。

クーラーの設定温度はそれぞれに夏の寝室夫と我とは

稲吉友江

ラジオより昭和の歌謡流れきて午前三時の青春の中

散歩より戻るや夫の大きな声「雉の親子が畑にいたよ」

真夜中に目覚めてラジオをつけると若かりし頃聞いた歌が流れて来ました。あの頃のあれこれ青春の思い出が。

二リットルの水ひと箱をよろよろあと五段かなわが家の階段

鈴木美耶子

降りてゆくわが家の階段ふはつふはフレアースカートの裾捌きつつ

ワンピース爪先立ちせず今日は着る裾にはいくつ不揃ひ縫ひ目

階段を上りようやく玄関に辿り着くわが家。優雅なステップの時も、息切らす時も。上って降りて過ごしています。

境内はチガヤに笹の丈高く野となりゆくか無住なる寺

牧原正枝

カーテンのひらめく窓は見当たらず猛暑は続くか室外機まはる

記念にと君と植ゑにしモクレンよ酷暑に狂ふや葉陰に花が

今年の春はわずかで夏日、そのまま真夏日の何とも長い夏、植物は変化対応しているがはて、自分はどう思う。

水浸しの仮設住宅ありといふ能登をおもひてただただ祈る

森厚子

孫生まれる予定日迫る日々となり息苦しさもいよいよ増しをり

付き添ひてボールプールとふところに来子どもら四人大人ら四人

正月気分のテレビに地震の速報が！以来、能登を直視できずに……。なのに大水害とは。祈るしかありません。

秋葉さんのお札頂く秋日和飛行機雲の交差する空

大 武 智 子

バスタブに身を横たへてつくづくとわが右脚のリンパ浮腫見る

百年後ないかも知れぬこの国の未来のための清き一票

病氣と共に生きるとは？健やかな時と同じく、喜びも悲しみもあり、平凡な日常に変わりがあるはずもなく。

## 現代学生百人一首

東洋大学

世界中飾り彩る十七色地球の未来の希望か枷か

慶應義塾中等部3年 山川 颯月

夏休みもがきまくった部活動大会中止心が折れる

国士館高等学校1年 藤田 潤夏

新語なの「はにゃ」と言われて困惑中誰か私に意味を教えて

国分寺市立第五中学校3年 川瀬 天寧

大好きな車の運転やめにしてバスに乗る祖父小さく見えた

国分寺市立第五中学校3年 渡邊 結



女子美生絵の具のついた仕事着の汚れでさえも作品のよう

女子美術大学付属中学校2年 丸井 遥香

やつが来た「ブン」と横切る吸血鬼正義の父のバトル始まる

世田谷区立喜多見中学校2年 石川 奏太

「今日濃いね」ポカリの味に気づく君好きの想いに気づくのはいつ

専修大学附属高等学校1年 長岡 芽

あの人は今頃なにをしてくるかな知りたくなるし知りたくないし

専修大学附属高等学校2年 石川 直樹

『俳句』

一灯や手帳にはさむ赤い羽根

植村公女

水の秋体内時計やや遅る

野良猫と黄ばなコスモス無人駅

朝冷えに水やりためらう朝餉前

木村歩歩

読み進む孔明の策虫の声

秋の蚊や赤き一刺し命尽く

風立ちて一度に走る落ち葉かな

べろ藍の北斎ノ海野分き浪

大北風や宝富士関出身地

今泉如雲

むかしここ塩の道なり冬の草

恵信尼にゆかりの寺や冬の蝶

豆腐売り笛の音かすか冬隣

矢崎直人

柿の実の葉は落ち柿は柿の色

冬隣ジヨギング中の定点観測

木枯しや心をうつす窓ガラス

立冬やかかけかえられる看板の

奥多摩は道を選ばず片栗の花

今泉由利

春光の輝やきスーパー・カミオカンデ

バラ科にバラ属と咲く赤いバラ

白糸の滝の飛沫にツリフネ草

クマツヅラ科ムラサキシキブの実紫<sub>みむらさき</sub>

藪中にヤブミヨウガの白く咲く

羽根つきに間に合いにけりムクロジ果

三頭山レンゲシヨウマに会ひにゆく

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

気も晴れて天童の旅秋めきぬ

木風

曇りても稲穂の黄金輝けり

吟友を弔う秋や句二三

十時頃ひとり音無き十三夜

田舎びたみかんを手にし秋の月

十月に終わるともなき熱帯夜

カラオケで健康づくり秋の昼

雄山

年年と長く続くや日の盛

秋の夜や許すかぎりの吾の時間

つね子

暮かかる公園芝の夕映える

秋冷や伊香保の夜に編む絆

精仁

風ふいてかすかに届く金木犀  
ベランダでスーパームーンシヤメ写す

恵風

秋風を見る雑木林の赤とんぼ  
池の端哀愁の吟秋の宵

雅山

木犀の香りしみいる朝ごはん  
コスモスは花咲くことを忘れたり

金子

## 折々の詩(十)

ふじのけんじ

いびつ

健康診断で撮った  
レントゲンを見せられた  
肺よりも  
背骨に目が行く

曲がつているのだ  
しかもすぐ分かるくらい  
医者は  
まあもう直らないからしょうがないと言った  
何か気になりながら  
整骨院へ行く  
藤野さんは腰骨が左に曲がつているので  
そのバランスを取ろうと上半身が  
右に曲がつているように

本来真つすぐなのが  
S字のようになっちゃっているな  
と言われた

それじゃ私はいびつなんですね  
と話しかけると 先生は笑いながら  
いびつじゃない人なんていないんですよ  
と言った

そうか  
真つすぐな規格のような体がないのと同じで  
規格のような人生もまた無いんだ  
ひとりひとりがいびつの自分と生きてるんだ  
と思うと 妙な連帯感が出てきた

いびつな体でいびつな人間として  
いびつな生を生きる  
覚悟のようなもの 生まれた

## 五感を澄ませば (30)

杉浦恵美子

### 女ことば

先日、新聞の第一面の見出しに

「同性婚認めない規定『違憲』」と。

世の中も大きく変化しているようです。

また最近再燃し始めた「夫婦別姓」問題。

私など何十年前、結婚に際して同姓になることに、アイデンティティが損なわれる気がして抵抗感があり、早く別姓が認められるようにならないものかと願っていましたが、依然として現状維持。長い間に今の姓にすっかり慣れて、旧姓に未練はなくなりました。

そんな折、最近『女ことばってなんなのかしら?』「性別の美学」の日本語『平野卿子(河出新書)』という本を読みました。

改めて「性別」ということを、考えさせられました。

さてこの本によると

「女ことばは作られたもの」とか。

「女言葉が正統な日本語に位置づけられたのは、朝鮮半島や台湾などの植民地でとられた同化政策の中でのことです。『女と男で異なる言葉遣いをする』のが日本語のすばらしさであるとされ、多様な言葉づかいの一部だけを『女言葉として語る』ことで、概念が生み出されました。」

「さて、ここで注意すべきは、女ことばが『日本女性』は丁寧で控えめで、上品だという(女らしさ)と結びつけられ」という指摘です。」 (同書p18、19)

では、その女ことばの特徴とはどのようなものか。

・特有の終助詞(「のよ」「わ」「かしら」「わよ」など)を使う

・訛った母音(「うるせえ」「知らねえ」など)を使わない

・卑語や罵倒語(「尻」「畜生」など)を使わない

・接頭辞「お」(「お砂糖」「お花」など)をつける

・感動詞「まあ」「あら」など

・敬語をよく使う

(同書p17)

すると「女ことば」には何らかの制約が出てくると本書は指摘しています。



一例を挙げると、女ことばは命令ができません。

「やめろ！」は命令ですが、女ことばでは「やめて！」。

これはお願いになります。

これでは女と男の対等な対話が成り立ちません。

しかし今やジェンダーフリーが念頭に置かれるようになり、同時に女ことばも減りつつあるようです。

いまどきの女子のことばに「よ」「わ」「ね」という語尾はないのだ凛と行くのだ

さいとうすみこ(NHK短歌)

それでも女ことばを使うことが最良と羨けられてきた世代には、女ことばは女らしさであるという精神までも植え付けられてしまった気がします。

子供の頃大好きだった「花嫁さん」の絵本、抱き人形。弟が「僕も」と真似して人形を背負っていたのを「変」と思ったのもこれは女の子の遊びとして区別していたからでしょう。

また、昭和の演歌の歌詞の女性たち。

「女ごころの未練でしよう」

「私は港の通い妻」「君は心の妻だから」

「尽くして泣きぬれてそして愛されて」

「あなたがさがしてくれるの待つわ」

「くちなしの白い花おまえのような花だった」

「二度としないわ恋なんか」

枚挙に暇ありませんが、共通しているのは出しゃばらず、ひたすら待つという女性像。

翻って現代、そんな女性、何処にいるかしら。

ふと「伊勢物語」の「筒井筒」の段の後半を思い出しました。夫に別に通う女が出来ても恨むどころか、夜道を通う夫の身を案じる歌を詠んだため夫が感銘して元の妻の許に戻ったという話です。

あれは、そんな話は滅多にないことだから当時の女性の哀しい願望だったのだろうと思っていました。昭和の演歌の女性像は、逆に今の男性にとつて淡い願望になってしまったのかもしれないと思いました。

女ことば利点ありけり主語なくも男女の区別がつくことがある

## 附録（三十）

矢崎直人

### 柿の実の葉は落ち柿は柿の色

柿の木の葉がすっかり落ちて実色づきました。異常に暑い夏が終わり秋になっても暑い日が続き季節の歩みが遅い年です。それでも着々と進んでいたのだなと思えました。鳥がつついて穴が空いた柿が木の下に落ちています。柿の実の色づいた色は、太陽が降りていく夕焼けの色に似ていました。

### 柿の実の日々色づいて柿に生る葉は落ちて実は柿の柿色

### 冬隣ジョギング中の定点観測

休みの日は家の近くの公園まで行き見沼代用水と加田屋川に挟まれた公園をジョギングします。途中の歩道橋で天気が良いと富士山が見える時もあります。銀杏が色ついてきました。芒の穂が揺れています。犬の散歩、家族連れ、テーブルとイスを持って来て将棋を指している人たちがいたりします。

休日のジョギングコース目に映る景色は日に日に冬に近づく

立冬やかけかえられる看板の

駅から家に向かう途中にあるスーパーマーケットが新装開店の幟が立ち名前が変わるようで見板が新しく架け替えられました。

与野フード新装開店スーパーの名はTAIRAYAに看板が出来

豆腐売り笛の音かすか冬隣

お豆腐屋さんさんの笛の音が聞こえてきます。独特な音します。冬になって空気が澄んでくると離れた所の音が近くに聞こえてきます。車がゆっくり動くのに合わせて笛の音も動いていきます。

豆腐売りの笛の音車がゆっくりと動いて空気冷たくなりぬ

## 『雑感』

中屋保之

「新年の華やかさを一変させた「能登半島地震」を皮切りに、世界各地での自然災害が頻発した令和六年、月めくりカレンダーも残すことあと一枚となった。あの暑さは何処へ?!

同じ一月には、米国でも寒波襲来や竜巻発生による非常事態宣言などに見舞われた。その後も、世界各国での洪水、火事、地滑り等々の報道が続いている。六月には、地震の復興も俟ならない北陸を豪雨が襲う。誠に気の毒としか言いようがない。ましてや「地球温暖化」が自然災害の要因の一つであるならば、人類の英知を結集せねばなるまい。明るいニュースもあった。日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が今年のノーベル平和賞を受賞した。核兵器廃絶に向けての『人類の英知』のきっかけになると期待をしたい。ノルウェー・オスロでの授賞式へ派遣する代表団の旅費を募るためクラウドファンディングを始めたところ、初日に目標額の一千万円を超えたそうである。また、パリ・オリ&パラをはじめとするスポーツの世界では、様々な困難を一致団結して乗り越えた先の感動を目の当たりにした年でもあった。一つの目標、目的に対して真摯に取り組む姿勢とその成果に我々は心を揺さぶられる。国や権力者もそうであって欲しい、と願う。

失題

近藤勇

丈夫立志出東關 宿願無成不復還  
報国盡忠三尺劍 十年磨而在腰間

丈夫志を立てて東関を出ず 宿願成る無くんば復還らず  
報国盡忠三尺の剣 十年磨いて腰間に在り

《一人前の男子が志を立てて箱根の関を越えたからには、宿願が成らなければ再び故郷へは還らない。

国の恩に報い忠義を尽くす為のこの三尺の剣は、この時のために十年もの間磨いて腰に帯びているのだ》

先の衆議院選挙で新しく国会議員に選ばれた諸氏に問う、青雲の志、有りや無しやと。今のところ、

その気概を感じ難い。

將東遊題壁

釋月性

男兒立志出鄉關 學若無成不復還  
埋骨何期墳墓地 人間到處有青山

將に東遊せんとして壁に題す 釋月性  
男兒志を立てて郷関を出ず 学若し成る無んば復還らず  
骨を埋むる何んぞ期せん墳墓の地 人間到處有青山

詩吟を習っている。些かこじ付けではあるが、来年も「気概」を持つて精進しようと思う。

『酔いの徒然』(二五二) 丸山 酔宵子

のである。

トンネルを抜けて迫るや秋の富士

『ゆつくり鈍行新幹線での博多行』

酔宵子

博多にはビジネスがらみで、年に数回行っているが、いつも博多でのスタッフとの一献は大変な楽しみである。

今回は一足飛びの飛行機ではなく、JR東日本とJR西日本を乗り継いで、新横浜から博多まで新幹線で行ってみようと思立ったのである。

JR東日本は「大人の休日・ジパング倶楽部」に入会しているため、新横浜から新大阪までの乗車券と特急券は3割引き。しかし、「のぞみ」は乗車することが出来ず、「ひかり」か「こだま」のみであるが、昼前の新幹線は自由席でもガラガラで右側2人席を独占してのリラックスマスク快適な旅のスタートである。

新横浜では、大好物の「崎陽軒のシウマイ弁当」をゲットし、12時頃から、丁度丹奈トンネルを通り熱海を過ぎたころから、初雪の富士山を見ながら食べ始める

「ひかり」の新大阪までの停車駅は、静岡、浜松、名古屋、京都ぐらいで、2時間30分程度で「のぞみ」と30分も変わらない。

食事が終われば、持ってきた最近の愛読書である沢木耕太郎「バーボン・ストリート」を広げてゆつくりと読書である。

暫くすると、列車の心地よい振動リズムが眠気を誘い、うとうととしてきて、一気に熟睡状態である。

目覚めれば、車窓には秋の刈り取った田園風景が延々と続いている。「あれ？ 今、何処？ 何をしてるんだ！」と一瞬、寝ぼけ状況。「あつそうか。今日は、博多に向かっているのか。もう関ヶ原か……」

秋の田や新幹線で昼寝覚め

酔宵子

暫くして京都に着く。相変わらずのインバウンドの外人の観光客が京都で大量下車である。

いよいよ新大阪でJR東日本とはおさらばで、一度、新大阪で下車し、JR西日本エリアへと移動する。JR西日本の「みどりの窓口」で、新大阪から博多までの新幹線切符の購入である。

ここでも又、「大人の休日・ジパング倶楽部」で3割引きが出るのだが、もっとお得な割引特権を持っているのである。それは、「JR西日本株主優待鉄道割引券」で、実に半額割引なのである。

JR西日本新幹線「さくら」は新大阪から博多まで、新神戸を経て姫路、岡山と晩秋の山陽路を、只管、博多へと瀬戸内海を左に見て進んで行く。今年も2回ほどこのJR西日本新幹線の山陽道を通って訪れた名勝地があった。それは、晩春の錦帯橋と山口市と晩夏の小泉八雲の所縁の地・宍道湖のある松江である。

まだ昼下がり。酒好きの呑兵衛としてはこんな時こそ一杯とは思うのだが、酒は夜の楽しみにして「我慢、我慢」の、厳しい自己抑制である。また、沢木耕太郎「バーボン・ストーリー」を取り出し、続きを読み始める。

沢木耕太郎とは年代が同じくらいで、初期の「敗れざる者たち」の頃から、ほぼ全冊読んでのではないかとと思う。同書は、スポーツ・ノンフィクションの古典であり先駆けともいえる傑作で、何かを求めるボクサー、栄光の陰にいた名プロ内野手、命を絶ったマラソンランナーなどドラマチックな筆致は今でも思い出せる。

沢木耕太郎の捉える視点、文体そしてリズムがいつもワクワクさせてくれる。今年も、中国大陸の奥深くまで「密偵」として潜入しラマ僧に扮したまま、幾度も死線を彷徨<sup>さまよ</sup>った若者の長編「天路の旅人」も一気に読んだ。

「あれ！もう下関か！」読書とうたた寝を繰返し。関門海峡を越えればもうすぐ博多である。今日の博多の一献は、玄界灘の魚の切り身の炭火焼とのこと……。

### 博多には秋の風吹く旬の酒

#### 酔酒子

## 子守唄 わらべうた そして童謡

高橋育郎

「ねんねんころりよ おころりよ」（日本）「眠れ 眠れ 可愛い我が子」（シユールベルト）「眠れ 佳い子よ」（モーツアルト）が、小中学校の音楽の時間に教えられ、よく歌われた。

子守歌は何と安らかで、おだやかなことか。  
戦争には無縁。平和そのもの。いうなれば絶対平和です。

だが平素は、歌われることも、聞くことも少ないです。赤ちゃんを寝かせつかせる唄だからでしょうか。でも、戦後暫くは、よく歌われラジオで放送していましたが、テレビが始まった頃は「中国地方の子守歌」（ねんねこしゃっしやりませ）「五木の子守唄」（おどまぼんぎり）がよくきかれました。あとは各地域（県）の子守唄が放送されてきました。

寝かせ唄とも言い、遊ばせ唄、わらべうた へと通じ、更には童謡へと続きます。



この世から、戦争が絶えない現状をみるとき、子守歌の価値を知り、もつと積極的に歌い、聞くべきではないでしょうか。

戦争をしている国では、子守歌は唄っていないでしょう。

戦争は、言うまでもなく悲惨で無益なもの。

子守唄、あるいはわらべうたによって、戦争を起ささない。

平和のありがたさを知るべきです。

さあ、子守歌を歌い、聴こうではありませんか。

童謡も歌われなくなつたことは残念です。

平和はいいな。

平和の尊さ、価値を識りましょう。

もう一度言います。

世界絶対平和のために子守歌の価値を知り、唄いましょう。

世界へ向けて発信しましょう。

誓います。子守歌のあるところに、戦争はありません。

## 絹の話 (169)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

### 絹から見た『女ひとり』の歌

#### 戦後の呉服の売上絶頂期

永六輔作詞の「女ひとり」が大流行した昭和60年頃は新幹線が開通し、東京オリンピックも終わり、戦後復興の中で経済が急速に発展した時代でした。その頃はまだ着物が財産と思われていて、女性の社会活動も活発になり、戦争で失われたり買えなかった反物が争うように売れた時代でした。反物をタンスに満たし、着るつもりがなくても、死んだ時恥をかかないように備える事が世の中の「ウネリ」でした。

戦前は絹糸の販売は外国（主にアメリカ）向けが中心でしたが、この時代になると国内絹需要が急増し、有名産地の紬などもはやされ、特に大島紬の販売量はそのピークを迎えていました。

#### 「女ひとり」の歌が流行

このような時代背景の中、永六輔作詞の「女ひとり」が大流行しました。

\* 「京都大原三千院 恋に疲れた女がひとり

結城に塩瀬しほせの素描すざくの帯が 池の水面にゆれていた

京都大原三千院 恋に疲れた女がひとり

\* 「京都榎尾高山寺 恋に疲れた女がひとり

大島つむぎにつづれの帯が 影を落とした石だたみ

京都榎尾高山寺 恋に疲れた女がひとり

\* 「京都嵐山大覚寺 恋に疲れた女がひとり

塩沢がすりに名古屋帯 耳をすませば滝の音

京都嵐山大覚寺 恋に疲れて女がひとり

この歌の歌詞の紬の着物はこの当時の女性の垂涎の品々で、多忙で恋を忘れていたやや年増の女性に販売促進ソングの様に響いたと思われます。紬の柔らかくザクツとしたな肌触りの着物が恋に疲れた女性にピッタリです。京都三千院は恋の一念を癒してくれる所としても当を得ています。

#### 京都大原三千院とは

三千院は天台宗開祖の最澄が、奈良の強大な仏教勢力から距離を置いたため京に遷都を果たした桓武天皇の庇護を受けて比叡山延暦寺の建設時に住まわっていた庵が、後日「声明しょうみょう」を修練する天台宗の重要な寺院となった所です。その後、息子の嵯峨天皇も最澄を庇護しましたが、嵯峨天皇は空海の庇護者となってゆきます。

天台宗の基本理念は「一念三千」と言って「人の思う一念は宇宙の森羅万象（三千）からもたらされている」という教えです。

声明はインドの古代のサンスクリット語の音律にならって僧が唱える声楽で、天台宗やその流れの浄土宗、浄土真宗などで唱えられているものです。まさに恋の一念に悩む女人が訪れるのにふわしい所ではないでしょうか。

余談ですが、桓武天皇の50余人の皇子は賜姓制度により「平」の姓を賜りました。

嵯峨天皇の皇子は「源」の姓を賜り、両者は都に留まる人と各地に広がって行く人に分かれ、平将門、平清盛、源頼朝などの武将となって行ったのです。

### 結城に塩瀬の素描の帯

結城とは結城紬のことで、現在の埼玉県結城市で糸に撚りを掛けない最古の糸づくりの技で織られる紬です。軽くて温かく秋から春先に着られます。夏の恋に秋風が吹いて来た事の暗示ででしょうか

塩瀬は新潟県五泉市地方で織られる羽二重風で横畝のあるしなやかな厚地の帯で、手書き友禅染で染められ、秋から春にかけて締められます。

### 池の水面にゆれていた

絹を着ていると「幸せ愛情ホルモン」が分泌され、庭の木々を抜けた空気が水面の水分含みマイナスイオンになって打ち水をした所を歩く様な爽快感を感じます。恋のしがらみを癒すにはまことに良い環境です。

### 京都梅尾高山寺 大島紬

高山寺は戦乱による未亡人の救済などをした明恵上人が開いた古刹で鳥獣戯画が納められているお寺です。

大島紬はこの時期、着物を揃えるのに他の紬は買わなくても「大島紬だけは」と言われた品でした。

### 京都嵐山大覚寺

嵐山は風光明媚で嵯峨天皇の離宮が置かれ、後日それが大覚寺となり、心願成就を願う寺院になりました。塩沢かすりとは新潟県南魚沼地方で織られる繊細な緋模様の特長の絹織物で、帯は簡略な名古屋帯が似合います。

### 永六輔の深い教養に驚嘆

この歌は時代の着物の売れ筋を捉え、良い絹織物を産する北陸の産地を歌に載せ、和服販売のメッカの京都を舞台に滝や池のほとりで紬を着て癒しホルモンに包まれた女性を登場させるなど、実ににくい構成です。

## 「江上浩二の独り言」 84 江上浩二

## 文盲の母

この独り言は、マイブログをワードプレスでアップし始めた比較的初期の頃（二〇一〇年夏季頃）、オモニ（母）、姜尚中著（集英社）をよんで、ポジティブな意味で、文字を解する人でも聞いたことを頭に留め、推敲を行い、それを文字に起こさず、音声のまま、はなしてみるという実験をやつて欲しいという提案である。

なぜか文盲ということに取り憑かれてしまった。彼のオモニがそうであった。言語的にしか知らなかった文盲のありのままを、姜尚中さんのオモニで知った。私が今の歳（当時五十七歳）まで生きてきて、残念なことに自分の周囲には姜尚中さんのオモニのような方と出会う機会がなかった。文字を知り得た者の忘れた、失った面を考へさせてくれた。ちょっと飛躍して、文字が無かった時代に生きていた人間は全員が文盲であり、文盲という事を誰もが考へる余地のない営みをしていた。お互いに対等に喋り合っていたのである。文字が出来、読み書き出来る時代に生きる文盲の方とは大きく異なると考へた。

二〇二四年の今になってTV番組（光る君へ、紫式部

が源氏物語をどの様な理由があつて、認め・したため、詠んだのか）の中で、上流貴族の男性でも、如何に幼少期から漢字・漢文を中心に文字の習得に大変であつたかが描かれている。ましてや、女御やもと。時代が北条氏の鎌倉時代になって、御成敗式目という法律の成文書が作られて、これは東国の武士たちが読み書きが不得手だったので、これを改めさそうとする幕府の苦肉の策とも言われてる。

読み書き出来る時代（日本では江戸時代に読み書き算盤を中心に寺子屋で学び庶民の文盲率は低かつた）に生きる文盲の方の苦難が、彼のオモニから分る。しかし、文字を知り得た健常者が、文盲の方の活き活きした生き様を真似出来ない事もそうだろうと思つた。兎角文字を知っている、何か話そうと思つたとき下書きをちらちら見ながら話したり、喋ることを業としている者でも台本に沿つて喋るのである。単刀直入にいうと、文字で書かれた下書きを見ながら読むと、流れるような喋りにはほど遠いものになつてしまうのである。私の経験ではある結婚式で頼まれたご挨拶が、何となくこちなく、活きた喋りにならず、文字を追う硬い読みになつてしまつたのである。

彼のオモニの描写から

・母は熊本の方言にも慣れ、不思議なことに、その口調

にはナマリ（朝鮮のイントネーション）がなかった。オモニが副業で回収業（当時のバツタ屋）を始め、人に金属の重さなどを誤魔化され、ソロバンを見よう見まねで学び、廃品の種類も自分だけにわかる記号に置き換え、二度とみくばれないように、精一杯の努力を惜しまなかった。ムダン（巫女）の様な事が出来るオモニ、ハレの祝いや靈魂を慰める命日に、両足をぴよんぴよん弾ませるように踊り、口からシユー、シユーと意味不明の音を発する母の様子は何かに取り憑かれたように殺気立っていた。

• 字が読めんけん、何の話し相手にもなってあげられない、字が読めれば少しはあん子が考えよることばわかってあげられるのに、文字が読めないせいか、母は自分の五感で知覚できる世界だけを頼りにしてきた。

### 最期のテープ

手紙の書けない姜尚中さんのオモニは後年、文明の力、カセットテープに吹込んだ「ことばのてがみ」を残されていた。それが、オモニが亡くなってから、息子へ届けられた。本当素晴らしいプレゼントになった。

それは、心の中でかき、心ではなし、しゃべる。

そのしゃべりは、恐らく、事前に推敲されていると察した。

文字が無くとも、諳んじれる言葉があり、瞬時の記憶の中で、諳んじた言葉を色々な場面で繰り返し、推敲出来るのだろう。

素晴らしい活き活きとした熊本弁であった。

一九五〇年生まれの姜尚中さん（日本名、永野鉄男）の母で、九州の対岸、釜山から当時の列車で三時間という鎮海の出身、戦前、戦後の混乱の中を九州、熊本で生き抜いてこられた。嫁いで初めてひとりで日本にたどり着いたところは、夫の社宅のあった、巢鴨三丁目とだけ覚えていたそうだ。右も左もわからず、ほんのわずかの滞在だったらしい。北九州の駅からどのくらい乗り換えたのかわからないが、無事にたどり着けた事で今の姜さんがいらっしやるので、微笑ましくも厳しい時代をつよく生きてこられた「文盲の母」であった。

追記、筆者は巢鴨三丁目というキーワードにも個人的に反応してしまった。今住んでいる駒込の隣駅が巢鴨で、巢鴨三丁目は所謂とげぬき地蔵（高岩寺）の旧中仙道商店街があり、私の友人がその商店街にお店を持っていて度々訪れた、駅側から高岩寺の二百メートル先までの狭い地域である。





初狩便り  
(37)



花野みぷり



## 注連飾り教室

師走の最初の土曜日に注連飾り教室が開かれた。講師は仲間の一人で地域の藁細工教室に通い藁でいろいろな作品を作り腕を上げている和さん。老若男女十人が参加した。

注連縄の基本、牛蒡注連をつくる。注連縄は左廻りで藁を巻き付けるので、三つ縄とも呼ばれる。二十本ほどの藁束を三束用意して輪ゴムでゆるく束ねる。二束をまとめて、根元が広がらないように左足で抑え、時計回りにまず二束を強くねじっていく。残りの一束は二束に沿うように巻き付けていく。左足で押えながら中腰での作業はきつくて、油断するとせつかく縛った藁が元に戻ってしまう。「きつい!」「難しい!」と言いながら、和さんの指導でなんとか牛蒡注連ができあがった。今風の玄関に合うようにリースに仕立て、庭にある南天や槇、松で飾ると…あら素敵。十人十色の注連縄が出来上がった。

この日使ったのは、コシヒカリの藁。稲刈り後、天日で十分に乾燥させた選りすぐりの藁と稲穂。稲を育て、米を食し、副産物の恵みを余すところなく使う古よりのしきたりに由来する注連飾り。良い正月を迎えられそうだ。

# 本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2024年10月18日

## 寒さ対策

秋といえば 秋雨

やわらかい雨が降ることに気温が少しづつ下がり

徐々に冬になっていく

というのが従来の秋でした

今では大きく変化し

それに順応して行かなくてはいけません

気温の高い日が続いています

天気予報によれば

今週の土曜日の夜から気温が大幅に下がるそうです

前回の大きな気温の変化の時に

体調を崩す方が多く心配になりました

ですので

寝具は冬物の掛け布団

寝間着は長袖 長ズボン

暑くて掛け布団を無意識にどかしても大丈夫な様に

ゆたぼん

腹巻

などを使い

睡眠時や朝方に寒さで起きないようにつまじょう

天気予報をチェックしながら

暑かった記憶は無くして 寒さ対策しましょう

今日も笑いながら楽しんで行きましょう



2024年11月01日

## 空気の乾燥

すっかり気温も下がり

すごしやすくから寒くなってきました

暑いのが寒いのか身体が分かりにくく

体温調節も難しくなってきました

外を歩いていると

咳をしている方を多く目にします

花粉なども もちろんあります

乾燥の季節になりました

乾燥と寒暖差アレルギーなどで

朝晩 むせるような咳が出やすくなります

細目な水分補給やマスクなどで

咽頭を潤わし 乾燥させないようにして

ウイルスなどを体内に侵入させないようにしましょう

皮膚のケアもそろそろ始めて

3S+ゆたぼん+ヨーグルト+八分+湯船

を丁寧にやっています

今日も笑いながら楽しんで行きます

## 「内燃」

冬は寒さで 閉じる季節  
寒気を皮膚で感じとりや  
冷気で外側 皮膚などは  
キュッと収斂 引き締まり  
密度が上がって 丈夫になる  
体表縮まり 圧増せば  
内にむかって 気血など  
陽気と共に 集まって  
内側 密度があがってき  
徐々に内側 内臓に  
気血が集まり燃焼し  
充実していく時となる

冬の衣は 厚いけど  
外気を皮膚にて感じれば  
皮膚は適度に収斂し  
季節にかなった皮膚となる

寒さを避けて 厚着しすりや  
衣服の内側 汗が出過ぎ  
皮膚は緩んで 陽気逃げ  
皮膚の保護は弱くなり  
粗い皮膚では この季節  
寒気に負けて 身体冷え  
深いところに 冷え入りや  
震えて発熱 風邪となる

冬の養生 外を閉じ  
内側 燃やして 温めて  
内燃させるが肝要じゃ  
外向き 表で活動せずに  
内向き 内部を燃やすべく  
自分の身体・感覚や  
心や思考と向き合って  
ゆっくり内に火をつけて  
自分の内側 照らし出し  
本能・欲求・感覚と  
向き合い育くみや 内燃える  
冬は内燃 動きを止めて  
内部を養う季節となる



## 「十月十日」

赤子は母の胎内で

十月十日 育まれ

二月毎に 五つの臓が

それぞれ主となり 活発に

胎児の成長 促すなり

最初の二月 肝の月

子宮に卵を 迎え受け

着床 胎の元となる

根っこを 広げて張っていく

三月・四月は心の月

母の心臓 拍動が

胎児の心臓 刺激して

心音活発 腸胃が育ち

男女の形も出来てくる

五月・六月は脾の月で

胎盤しっかり成長し

栄養・血流 多くなり

四肢が育ちて 動き出し

目・口も しっかり完成す

七月・八月は肺の月

皮毛と身体が 充実し

神経・感覚 育つ時

外部の音や光など

お腹の中でも感じてる

九月・十月は腎の月

胎児の脳の成長が

最終段階 育まれ

生まれる準備をしているぞ

十月に入れば 胎児から

母の身体と相談し 十日前後で誕生す

この世に生まれて 産声を

あげるが 赤子の存在証明

「原初のさけび」で始まりじや



岩手吟行 いわてぎんこう

其の二 そのに

横山精真

東風清翠 とうふうせいすい 芳春を恣 ほうしゆん にす ほしいまま

北水巖山 ほくすいがんざん 吾が身を寄す わがみよ

訪ね得たり吟行 たずえ 幾英傑 ぎんこう

無疆の碧落 むきよう 旅情新たなり へきらく

樹は芽吹きあくまで清し奥州路 りよじょうあら

〔語釈〕 ○北水：北上川。○巖山：岩手山。○幾英傑：後藤新平、齋藤實、宮沢賢治、新渡戸稲造他。○無疆：無限。  
○碧落：広大な青空。

〔通釈〕 春風に清い緑は花咲く奥州の春を恣にしている。北上川や遠く岩手山を見ながら観光バスに吾が身を任せた。岩手には英傑が多く輩出しているがその何人かを岳精会で訪ねる旅をした。二泊三日の特に前半二日間は天気が良い、空は広く晴れ渡り旅情は常に新鮮なる思いであった。

### 岩手吟行（其二） 令和六年四月二十二日夜

東風清翠恣芳春 北水巖山寄我身

訪得吟行幾英傑 無疆碧落旅情新

※ 振り返ると、今年は吟行会が楽しい思い出になった。天気恵まれて願ったり叶ったりであった。空は澄み渡り桜の花は散り残ったり満開であったり、野の花々も新鮮で、何よりも目に入る広葉樹は芽吹いて、黄色や黄緑の柔らかな清らかなさに満ちていた。拙詩も出来た。

バスからの景観や歩く度に清らかな空気を胸一杯に吸って旅情に満ちるものがあつた。よく吟じた。「英傑を訪ぬ」という固い名目であつたが、夜の宴会では逆にリラククスして、それ以上にカラオケが盛り上がった。吟で発声の力はある。皆さんよく歌つた。皆さんが目一杯声を出しているのに思わず拍手だつた。私は旅行中も体調があと一つと云う状況だつたから、尚更のことに皆さんの元気が新鮮だつた。二日とも順番が回らない人も居た。

一泊目は「千岩石温泉湯元東館」二泊目は「花巻温泉結びの宿愛隣館」。

岩手吟行（その三） 宴会 横山精真  
奥州の客舎 温泉を詫る（誇る） 吾は偉人を訪ね 聖賢（清酒と濁酒）に親しむ  
岳精の芳宴 元氣溢る 熱唱放歌 魂然ゆるが若し

編集室だより【二〇二四年十二月】

今泉 由利

歌集「地球にて」

一九七八年・一九七九年

パタゴニアのインディオが狩の石鏃を七つ集めて満足しおり

その昔狩猟に使いしという石鏃並べ置くなり私の枕もと

少しずつ日の長くなるを言いながらアルカリシールを食へ終りたり

露しとど含める朝の芝の道乗馬靴ぬらしてアロモに近づく

汗いずるまで馬を馳らせてわが手はいまだ冷く硬し

ケブラーチョの丸太は真白き灰となり昼餉のアサード焼きあがりたり

梅檀の木に繋がれて立つ馬のたて髪乱してバンペイロ吹く

馬上にて目測しおり蔓の伸びバッシュヨナリオは他に先がけて

鼻丸きマテの仮面の並びいしニカラグワの市場は戦いの中

ブラーチョの綿毛のごとき種子の飛ぶビル建つ町のまだ寒くして

日溜りを探して連ぶ鉢のコーヒーの木の伸びはやくなる

常に描くモデルの肌の光りおり楽しき心を今日待ちおらむ

隣り合うウルグアイ国は見えぬままプラタ河を指さし示す

六十キロ向うのウルグアイは見えずしてプラタ河は波立ちており

祖母よりのオブラートを仕舞い置く幼子の抽出しは鍵かかり

肘丸くなりたる黒きスエーターを仕舞はむとする今日よりは春

目的もなく歩きいてヒイラギの細かき花にめぐり逢いたり

夕食をしている時に私を呼ぶ電話は落馬の様をこまごま

私の心に入りてより五年過ぐラパチョの花の満開のとき

年輪を持ちたるままに石化せし丸太は重く遠く来りぬ

桜の花散りゆくさまをまた見むと次の風を待つしはらくの間

地平線まで続くカンポの新草に一際早くアフレキージョ咲く

水溜りを嫌がる馬に鞭を当てる今朝の二時間早く過ぎたり

泥んこを蹴ちらしてなお走らする私の白馬の愛しかりけり

レタス葉の三四枚を日々に食す亀の甲羅の不思議に堅い

洋梨の色良き一キロを買う時にリカルド・ペレスが声かけてゆく

ティパの実の黒きを踏みて行ききぬプラタ河畔のレストランまで

ハカランダの堅き書を仰ぎ見る私に射しくる太陽強し

馬上にて四人五人と挨拶交す朝の光のまぶしきなかに

わが髪の靡きいることを感じつつギャロップに行く白き馬と

銀色に見ゆるポプラの葉の色も私の髪を乱すと同じ春風

一日の終りのときに少しずつ文明歌集を読むに慣れたり

腕を組む裸婦の指先を描く刻は吾子らひじきを食べている頃

日の高き刻より裸婦と籠りいるわが気まぐれの線を描くため

肉を食むナイフで削った木のベンにて線を描きたり裸婦が描けたり

マルボンの散りたる赤き花びらの流れ片寄り春の雨降る

停まりいる車の上に音たてて桑の実落してゆく風のあり

地の色うすむらさきを淡紫に変えているハカランダの並木を通りてゆきぬ

散りてくるハカランダの花瑞々し幼らは拾う手にあふれつつ

天然の暑さ寒さなき飛行機にて真冬の日本へ近づきてゆく

ロッキーの鋭き山脈をかいま見てたちまち雲の中に入りたる

アラスカの針葉樹林に沈みゆく太陽はのこす色ほのほのと

長々とアルゼンチンまで流れゆくチエテ河の岸ブラジルに居る

ラブラタの水にさらされまよまよの小石も拾い日本へ行かむ

望みいし日本の空気を吸いながら何か足らない思いもありぬ

ゴミを出す火木土曜日に従って住み慣れゆくか東京の街

大根はほとばしる水気を持つものと忘れて長き日々過ぎて来し

日本の文字の看板を読みゆくアルゼンチン国籍のわが幼子と

米の味を知りたるごとくよろこべるわが幼子にささにしき炊く

カールせる髪の軽やかさ思はず裸婦アマリヤと遠くにおりて

## 「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フォレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail [imayurizm@gmail.com](mailto:imayurizm@gmail.com)

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和六年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利